

カナにおける結婚式でのマリア様

カトリック教会にとってマリア様はイエス様の母親であると同時にわたしたちの人生のためにイエス様が与えて下さったもう一人の母親です。イエス様の口から「見なさい、あなたの母です」と告げられたとおりです（ヨハネによる福音書 19 章 27 節）。カトリック教会はこの言葉を受け、わたしたちに寄り添いながら一緒に歩んで下さる“母親の姿”をマリア様のうちに見出します。今回はこのマリア様の姿を、イエス様やマリア様、ヨセフ様が過ごされたナザレからほど近い「カナ」（直線距離で約 18 km）という場所で行われた結婚式の場面のなかに見つけたいと思います（ヨハネによる福音書 2 章 1 節-12 節を参照）。子どもたちも、この一ヶ月、マリア様のことを思い起こしながら過ごしてくれました。これからもマリア様が子どもたちとご家族の皆さまの歩みを支えて下さいますように。※聖書本文は載せておりません。

1、ぶどう酒が足りなくなった時に・・・。

●親戚か友人だったのでしょう。彼らの結婚式にイエス様やマリア様が招かれました。招待客（ゲスト）なので、彼らではなく結婚する当事者たちが主役です（人生の節目に立ち会うマリア様やイエス様の姿がここにあります）。教会が結婚式を大事にするのは、神さまの思いがそこにあること、このカナでの結婚式のように、実際、イエス様やマリア様が“寄り添っている”ことを伝えたいためです。

●マリア様はぶどう酒が足りなくなったことをイエス様に報告します。これはイエス様のことを信頼していたからに他なりません。当事者たちが恥をかかないように、自分にできること（イエス様を信じ、信頼すること）を貫き、見えないところで動いて下さったということです。息子を信じて動く母親の姿がここにあります。

●ぶどう酒がなくなることは当事者たちにとって恥をかくことになります。準備が足りなくて、招いた方に対して迷惑をかけてしまうからです。マリア様は当事者たちが恥をかかないように、彼らのもう一人の母親として、他の誰もが気づきもしなかったことにいち早く気づき、動いて下さる存在だということなのです。

●マリア様は 4 節でイエス様から「自分とどんな関わりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と言い返されます。イエス様の言う「時」とは自分が救い主として命を捧げる「時」のことです（最後の晩餐の席で、パンとぶどう酒を奉納し、ご自分の血とからだを捧げる記念として行うように命じました）。この言葉をマリア様は理解できなかったはずですが、それでも、マリア様は当事者たちの「時」に寄り添うことが神さまの思いだということを確認していました。大天使ガブリエルからのお告げを受けた際の彼女自身の言葉がここでも思い起こされます。「お言葉どおり、この身になりますように」（ルカによる福音書 1 章 37 節）。

●マリア様は5節で「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と召し使いに伝えます。イエス様を信じ、信頼していたからこそその言葉ですが、召し使いに対しても同じ思いを抱いていたことが伺えます。「この召し使いたちは結婚式のために奉仕している人で、幸せになって欲しい当事者たちのために陰で奉仕することの大切さを知っているはずだから、きっと私を信頼して、信じてくれる」。そんなマリア様の心の声が聞こえてくるようです。マリア様はわたしたちのことを信頼し、信じてくれる母親なのです。

2、人々を巻き込むマリア様のひとこと

●マリア様のひとことで動かされた召し使いたちは、今度はイエス様の言葉を信じて「二ないし三メートル入る」の水がめ6つに水を満たして世話役のところを持っていきます（※一メートルは、今でいうところの約39リットルほどなので、ざっと計算しても約234リットルにもなります）。約234リットルもの水を持って行くという考えられないことをしているわけですが、ここで思い返さなくてはならないことは、この召し使いたちは何に背中を押されたかということです。紛れもなく、それは5節の「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」というマリア様の言葉であり、それによってイエス様の言葉を信じて実行したということなのです。マリア様は「イチかバチかイエス様の言葉を信じてみて下さい」ではなく、「わたしは神さまが救い主として送って下さったこの方を信じていますから、あなたもイエス様の言葉を信じて下さい。信じて動いてくれるあなたを他の誰でもなくわたしが支えています」という思いを込め、召し使いに伝えました。彼らはこの思いに突き動かされたのです。

●人は自分のことを心から信頼し、信じてくれる存在を目の当たりにしたら、今度は自分が真剣にその人のことを信頼し、信じようとしめます。マリア様はあらためてその事実を教えてくれる方なのです。自分のことをそこまで信じてくれる。この体験は、どんな言葉、誰を信じたらいいのかが分からなくなるような現代にあって特に大切なことではないでしょうか。

●ぶどう酒にかわった水を味見した世話役は花婿を呼んで「あなたは良いぶどう酒を最後まで取って置かれた」と言って褒めたたえます。この出来事は主役である当事者たちを含め、その場にいた全ての人が幸せな気持ちを共有することになりました。

※このカナにおける結婚式の話は、イエス様が奇跡を起こしたことを強調しているのではなく（実際、イエス様とマリア様が動いていたことは召し使いしか知らないのです・・・）、マリア様がわたしたちを応援して下さること、信じて下さっていることとともに、「あなたも神さまの思いを、そして周りの人をも信じて欲しいのです」というわたしたちへのマリア様自身の思いや、イエス様に願いを取り継いで下さる姿を伝えている内容なのです。

マリア様がわたしたちの過ごす毎日に大きく関わっていることを大切にしたいものです。わたしたちの母親として神さまの思いを信じる第一人者であり続け、神さまの思いを伝えるために困っている人や悲しむ人をカづけ、すべての人と喜びを分かち合うために働いて下さる、そんなマリア様にいつも心を向けることができますように。

